アンコール遺跡周辺の農村地域の生活実態と住居形態

—カンボジア, アンコールクラウ村中心部集落を事例にして—

THE LIFE STYLES & HOUSING STYLES IN THE RURAL VILLAGES
AT THE ANGKOR MONUMENTAL AREA

A case study of Angkor Krau village, Kingdom of Cambodia

今田 治宏*, 江口 千奈美**, 中川 武***, 後藤 春彦***

Haruhiro KONTA, Chinami EGUCHI, Takeshi NAKAGAWA
and Haruhiko GOTO

This study shows the life style and the spatial usage in the rural villages at the Angkor area from a field survey. It aims to present the vision for the village's future, by considering the influence that occurs to the villagers from tourism and the labors such as the conservation projects at the Angkor monumental area as a basis. Angkor Krau village, which is nearby the Angkor monuments has been chosen as a case study district. As a result, the following matters were clarified. Firstly, the actual life style and the economic condition. Secondly, the housing styles and its characteristics. Thirdly, the actual usage of the space in and around the housings. From this study, it can be said that, it is important to maintain the traditional usage method of the housings by creating an annex as an example, and the community development should be considered by viewing on the relationship among the Angkor monuments.

Keywords: Life Style, Housing Style, Rural Planning, Tourism, Angkor Monuments, Kingdom of Cambodia

生活実態 住居形態 農村計画 観光 アンコール遺跡 カンボジア

1 章. はじめに

1-1. 研究の背景と目的

世界遺産として知られているアンコール遺跡群^{注1)}周辺の農村部には、今なお多くの人々が暮らしているが、カンボジア^{注2)}の内戦の影響や観光開発等による近代化とともにその生活・文化のバランスが崩れてきている^{注3)}。一連の寺院建築群でもあるアンコール遺跡は地元住民の日常生活において、「生きた遺跡」として、心の支え、信仰の対象として密接な関係にある。また、現在崩壊の危機に瀕しているアンコール遺跡は、各国政府、国際団体や学術組織によって保存修復の援助を継続的に受けている^{注4)}。こうした保存修復事業において、多くの地元住民が修復技能工や清掃業務等の労働力として登用され、本来の農業中心の生活と比較すると、現金収入を獲得しうる機会も増えている。このような賃金労働の場が増えるにつれて、地元住民の生活環境に関する考え方にも変化が現れ始めている。こうした変化の要因、つまりアンコール遺跡の修復事業や観光化の動向が農村や村民に与える影響を把握する必要がある。これは多くの地元住民が生活する近隣農村と総合的な調和を前提に、今後のアンコール遺跡の保存と地域全体の持続的発展の方向性を描く必要性があると考えからである。

本研究では、アンコール遺跡に隣接したアンコールクラウ村の実態調査に基づく住民の生活空間の利用状況より、生活実態の変化がどのように住居形態の動向に影響を与えているかを明らかにする。これは、アン

コール地域での農村生活に於ける空間利用を基にした、コミュニティ基盤を維持や集落空間の更新など、今後の集落整備の方向性を模索する上での基礎資料になると考えられる。

1-2. 研究の方法

本論は全6章からなる。まず、アンコールクラウ村で実施した住民へのヒアリング調査より、生活とその周辺環境についての実態を把握し、整理する。特に本稿では、生活実態を知る手がかりとして、収入、生活時間とその行動等の項目に着目した。次に、実測調査を通じ、農村における住居形態の類型化を行った。住居形態は高床の高さと離れの有無に着目して分類し、各住居形態毎の空間利用方法を分析した。

尚、本研究は日本国政府アンコール遺跡救済チーム(JSA)^{注5)}において、2003年夏、2004年夏に行われた調査報告を基にしている。

1-3. 研究の位置づけ

海外の農村集落に関する研究は様々な文献³⁴⁾⁵⁾や報告書等によって報告されている。生活学の分野に於いては今和次郎⁶⁾が日本国内で民家の調査を行ったことをはじめとして多くの研究調査報告がある。1976年に韓国集落調査を行った早稲田大学韓国集落調査隊⁷⁾は、セマウル運動時における韓国の山村、農村地域の実情とその姿を把握するため幾つかの典型的集落の実態を報告している。また、環境社会学の分野に於いては井上⁸⁾⁹⁾が、東南アジアにおけるコモンズ共同所有の原則について述べている。アジア研究に於いては、河本¹⁰⁾は農山村住宅の形態変

* 本間利雄設計事務所+地域環境計画研究室 工修

** 早稲田大学理工学総合研究センター 各員研究員・工修

*** 早稲田大学理工学部建築学科 教授・工博

Toshio Homma & Associates, M. Eng.

Research Assoc., Advanced Research Institute for Science and Engineering, Waseda University, M. Eng.

Prof., Dept. of Architecture, Science and Engineering, Waseda University, Dr. Eng.

遷について、鄭ら¹¹⁾は住居形態の近代化とその変容について、尹ら¹²⁾は子どもの外部空間での行為について、バタナラ¹³⁾は集合住宅の現状と住まい方について、高村ら¹⁴⁾¹⁵⁾はアジアの都市と地域の再生手法に関する基礎的研究について、布野ら¹⁶⁾は歴史的地区の構造と保存のあり方についてそれぞれ明らかにしている。

本研究は、考現学調査の手法に準じた調査を行い、住民の生活実態と高床住居の空間利用の関係、更に地域との関係、特にアンコール遺跡と地域住民との関係が住居形態に与える変化に着目して考察し、その結果から集落整備の方向性を導き出そうとするものである。

2 章．対象地の概要

2-1. カンボジア、アンコール地域

アンコール地域とは、シェムリアップ市(人口12.7万人2004年統計)、シェムリアップ町中心部から約8km北に位置する、古代都城アンコール・トムを中心とし、8世紀頃から約600年に渡り、インドシナ地域で巨大な勢力をもった王朝の首都とその周辺地域を指す(図2-1)。アンコール地域内には数多くの寺院遺跡が遺り、それぞれの遺跡周辺部には多くの農村が広がる。地形は概ね平坦ではあるが、地域一帯にはわずかな高低差を利用して造営された数々の水路網や人工池、道路などの古代都市基盤の痕跡があり、多くの農村がこれら基盤の高低差を利用して水田、居住地等を形成している。地域内には聖山として標高:300m程度^{注6)}の小丘が3つ点在し、寺院遺跡とともに、現在も地元住民の土着信仰の

図 2-1. アンコール地域におけるアンコールクラウ村の位置

図 2-2. アンコールクラウ村中心部の配置図(上)と断面イメージ(下)

場として、或いは心のよりどころとして機能している。アンコール地域の主要な産業は観光である。2004年度の観光客は年間80万人であり、観光地化の影響でシェムリアップ市では3万人が観光に関連した職に従事しており、また観光地化により波及する影響も含めると関連従業者は5.5万人にのぼる。アンコール地域では流入する観光客と地元住民の動線の交差をどのようにデザインするかが今後重要な課題の一つである。

2-2. アンコールクラウ村

アンコールクラウ村はアンコール・トムの北西に位置し、村の面積は約720ha、世帯数は約400世帯、人口は約1000人程度と推測される^{注7)}。中心部はボルボト政権支配の終了後、最も早くに一定程度以上の密度で集落構成をとり、アンコール期の環濠や水路の

表 3-1. ヒアリング調査実施概要

実施日	2003年8月19日～26日 2004年8月02日～18日
対象	アンコールクラウ村24軒
方法	対面式ヒアリングアンケート調査
調査項目	家族構成、収入、一日の生活時間、家屋に対する考え等
回答数	22人、22世帯分の有効回答
通訳 ^{注8)}	日本語⇄クメール語 英語⇄クメール語

跡地を利用した水田に挟まれた小高い土地にある(図2-2)。住民の約1/4は中心部集落とそこに隣接する地域に住んでいるが、残りの3/4の住民は村内に分散して住んでいる。村内では至る所にアンコール期の古代水路網や石積み構築物の痕跡、小祠堂が存在し、場所によっては往時使用されていたクメール陶器などの破片が散乱する。また、アンコール遺跡内で見受けられる地元住人の多くがアンコール・トムから15km以内の農村に暮らしているが、アンコールクラウ村もその圏内にある。これらの人々は遺跡の修復やメンテナンス活動(修復作業員、清掃作業員、ガードマンなど)、商業活動(屋台営業、土産物販売、立ち売りなど)、娯楽活動(遺跡内でのピクニック、スポーツなど)、信仰活動(お参りなど)を行うために遺跡に来る。アンコール・クラウも日常生活を営む上で、多様な目的でアンコール遺跡と関わっている人が多く住んでいるため、アンコール遺跡に隣接した農村に住む人々の典型的なライフスタイルが伺える村である。

3 章．生活実態調査

アンコールクラウ村の住民に行ったヒアリング調査を基に、集落での生活実態を明らかにする。

3-1. 調査方法

2003年夏、2004年夏(計24日間)の間に中心部集落の民家24軒に暮らす人々を対象に調査を行った。中心部集落の周辺地域でも集落的なまとまりが徐々に形成されつつあるが、中心部ほどではない。調査は、中心部集落を対象にすることにより、隣接する住民同士の相互扶助や交流も考慮することができる。まず最初の調査として、家族構成、生活時

表 3-2 調査対象者の属性とその家庭の収入割合

被験者番号	名前	年齢	性別	年齢	性別	年齢	性別	年齢	性別	年齢	性別	年齢	性別	年齢	性別	年齢	性別	同居人数	一家の収入額(\$)*	家庭の収入となる就業先、職業等	収入/人数(\$/人)
No.01	C.C	69	女	44	女	21	男	—	男	14	男	25	女	18	女	54	男	3人	110	JSA作業員、糞子からの仕送り	36.7
No.02	B.S	54	女	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	8人	110	JSA作業員	13.7
No.03	A.	81	女	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5人	88	JSA作業員	17.6
No.04	M.R	39	女	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	8人	80	APSARA	10.0
No.05	K.T	14	女	74	女	37	女	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	8人	78.9	EFEO作業員	9.9
No.06	P.N	40	女	57	女	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	10人	73.7	APSARA	7.4
No.07	R.L	16	女	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5人	72.90	JSA作業員	14.4-18.0
No.08	D.N	34	女	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7人	70.5	JSA作業員	10.1
No.09	H.Y	25	女	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7人	68.4-73.7	JSA作業員	9.8
No.10	P.B	40	女	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6人	50	EFEO作業員	8.3
No.11	S.C	22	女	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2人	47.6-57.6	JSA作業員、村内での商店	23.8-28.8
No.12	C.S	43	女	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7人	47.9	APSARA	6.8
No.13	M.H	22	女	38	女	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6人	40	APSARA	6.7
No.14	S.S	19	女	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6人	40	APSARA	6.7
No.15	M.	12	女	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7人	26.3	APSARA	3.8
No.16	B.K	60	女	64	女	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3人	20	APSARA(ガードマン)	6.6
No.17	K.I	63	女	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6人	20	APSARA	3.3
No.18	O.L	72	女	33	男	7	女	5	男	4	男	3	女	2	女	20	男	8人	18.4	不明	2.3
No.19	P.P	31	男	72	女	29	女	6	男	—	—	—	—	—	—	—	—	4人	10.5-26.3	村の作業	2.6-6.6
No.20	S.N	41	女	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	10人	不明(60)	JSA作業員、米50Kgを息子から	6.0
No.21	L.R	46	女	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	8人	不明	物物交換 松明作り	
No.22	R.T	61	女	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4人	不明	作業員	

遺跡に関連した就業により収入を得ている者

*1ドル=3800リエルで計算

間、収入、遺跡と寺院との関わりについての対面式アンケートを通訳同伴で行った。

3-2. 調査対象者の属性

ヒアリング調査から有効回答を得られた22世帯の同居家族の人数と性別、年齢、収入は表の通りである(表3-2)。本表は世帯収入の多い順に並べられている。各家族の同居人数を合計すると、男性64名、女性74名、同居家族人数の平均は6.27名である。

まとまった現金収入がある世帯は、遺跡に関連した団体(JSAやAPSARA^{注9)}、EFEO^{注10)}等)で雇用されている人が世帯内にいることが分かった。こうした団体での修復事業は一定期間行われることから、継続的に雇用されるため、比較的安定した収入につながる。しかし、その仕事内容(修復技能工、清掃、ガードマン等)や組織の違いによって、収入金額の差異も認められる。

ほとんどの世帯において2人ほどが何らかの現金収入を得ている。その他に、農業に従事するか、物々交換を行う者もいる。婦人が内職として松明を作り、現金収入を得ている場合もある。こうした人は遺跡修復に関連した就労につく人よりも収入は少なく、他に現金を得る手段がない場合、生活は厳しい。働き口や農作業の無い者の中には集落内での手伝的な仕事、例えば家造りの手伝い等行い、わずかばかりの収入を得ている者もいる。

一世帯内の月収により、同居者一人当たり、20ドル以上を生活費として割り当てられるのは2世帯、10ドル未満が13世帯であることから分かるように、多くの家庭が現在の現金収入だけでは生活が苦しいと感じていると答えている。

3-3. 生活の様子

ヒアリング調査により、住民の生活行動について把握した。主に、村内での一日、農業牧畜、家事炊事、信仰とアンコール遺跡の項目についてまとめた。

〈村内での一日〉住民は朝早く(午前4時~5時頃)から行動を開始し、日中は多くの人が遺跡での仕事や田畑に出かける。村に残るのはお年寄り、女性、子供である。日中、お年寄りや女性は住居の高床の下で、内職の松明づくりや家事、子守り、近隣の人々や家族と団欒する。高床の下にはハンモックや木製の寝台状のテーブル、ござ等を敷き、休息や作業場としている。夜は昼間放牧されていた牛が高床の下に戻り、高床の上が家族の主要な居住空間となる。

集落内に電気は通っておらず、夜は懐中電灯・ろうそく等で明かりを得て生活する。また、自動車用の中古のバッテリーで駆動させたテレビを見たり、ラジオを聞きながら人々は夜を過ごす。テレビを持たない家

庭は近隣のテレビを持つ家に集まり、テレビ番組を鑑賞し、談笑する。

〈農業牧畜〉農作業には田畑の耕作と家畜の世話がある。多くの世帯は田畑を所有している。しかし、大半の人々は田畑の位置を地図で示すことはできず、歩く方角、時間、距離等でしか答えられない。その位置は徒歩1時間など、家からかなり離れていることが多く、集落の周囲に田畑を所有している人は少数である。耕作物は稲、ヤシ、バナナ、野菜等である。稲は陸栽培であり、水分を十分に補給できないため、収穫量も少ない。現在田畑に働きに出ている多くが女性や子供であり、三日に一度程度しか田畑には行かない。また、田畑が遠方にある、働き手がない等の理由のため耕作放棄地となる事も多い。

家畜を飼っていない世帯もある。田畑を耕すため何軒かの家で共同で牛を飼う場合もある。牛は農作業を行うため農地へ、朝、連れて行き、夜ともに帰宅する。牛糞は各家庭が溜めて肥料として売る。豚は牛と違い、収入源の一つとして飼育している家庭もあり、6ヶ月ほど飼育した後、市場へ卸す。ニワトリは放し飼いのため、飼っている数が曖昧なことが多い。家畜は家屋の床下部分で飼っていることが一般的だが、豚の専用小屋を設けている世帯が2軒あった。

〈家事炊事〉飲料水や沐浴等の生活用水は井戸から得ている。集落内には3種類、計11基の井戸がある。裕福な家庭では専用の簡易ポンプ式井戸を所有しているが、そうでない家庭では共同で井戸を使用する。ポンプ式井戸はNGOが掘ったものもあるが、ポンプが壊れた場合、村人には修復できず、放置されている。また、露天掘り式井戸は川の近くに掘られているため、水が濁っており、飲料水としては適しておらず、洗濯等に利用されている。飲料水は各家庭でバケツ等に汲み置きし、高床の下に保管されている。沐浴は井戸周辺で行われている。住居周辺に井戸の無い家庭からは、井戸を求める声が聞かれた。

毎日の食材、子供たちのおやつ等は村内の店や行商から調達している。各家庭に冷蔵庫等の貯蔵設備はないため、一回の食事で使用する分だけを購入する。しかし、米は多くの家庭で家屋の高床の上に大量に保管さ

図 4-1. 敷地範囲と井戸の位置関係

れている。また、魚や蛙等は仕掛けを作り、集落の近くで採ることもある。炊事は薪を燃料として、炉の周囲で行われる。家庭ゴミは住居の裏にまとめて捨てる。食料購入時のビニール袋がゴミとして村内の至る所に散乱している。農村部ではゴミの回収が行われないことと、近年までバナナの葉など、土中にかえる自然素材のものが包装材料だったため、ゴミ問題に関する村民の知識が殆どないことも原因の1つにある。缶やペットボトル、金属等については資源として買い取りにくる業者がいる。

シェムリアップには2つの大きなマーケットがあり、週一回から月一回程度、乗り合いバスやバイクにて買い物へ行く。食料品の他に衣料や飼料等は必ずマーケットで買う。

〈信仰とアンコール遺跡〉 現在、カンボジア人の多くは上座部仏教徒である。遺跡及び寺院へ参詣に行く頻度は、一週間に数回、一ヶ月に数回、一年間に数回、或いは全く行かない人まで様々である。どちらかといえば、高齢者の方が信仰心が深く、慣習的に遺跡及び寺院へ参詣に行く。また、若者世代は参詣だけでなく、レジャーを兼ねて遺跡、及び寺院に出かけている。

4章. 住居形態調査

アンコールクラウ村の中心部の住居とその周辺環境を調査し、住居形態の分析を行う。

4-1. 住居の敷地範囲

所有地の明確な境界線は無い。特定の木の位置が目印となる等、住人が示す敷地境界の概念はおおまかである(図4-1)。住戸が密集する集落内部には公共的な道路用地は無く、住民は家と家の間や各住戸の高床の下を自由に通り抜けるなど、公私の概念は明確でない。集落内部には公共的な道路は無いが、多くの住民が各々の住戸間の隙間を通り抜けるため、公道的な役割を担った通路が発生している。住居を新しく建てる場合は、こうした通路側に入り口を設ける。

4-2. 住居形態の類型

調査地域の建物についての属性をまとめた(表4-2)。礎石はコンクリート製、柱は木角材が多い。各住居の床上部分はほぼ同様の材料、形式であるが、高床の床下部分については違いが見受けられる。また、高床の高さ、離れに炉が存在するか否かで空間の使われ方に差異がある。

4-3. 高床の高さと下部空間にみる住居形態の違い

高床の高さと高床の下の利用の仕方によって3つのタイプに分類した(表4-3)。各タイプ毎に外部空間との関係が異なる。

【Type1】(7軒) もっとも簡易でバナキュラーな住宅として、他の東南アジア地域でも多く見られる形態である¹⁷⁾。高床にある程度の高さがある住居は家畜の飼育や物置き場として利用している。また、床高があり高く無い住居でも自転車、木材等の保管空間として利用している。村内の成人の平均身長は女性が1.5m、男性が1.63m程度と観察され、高床の下の空間での家事・家内労働及び隣人との社交を目的とした利用には床高が足りないため不適である。(建築面積、約20~30㎡)

【Type2】(15軒) Type1を大きく、かつ、床高を高くした住居形態である。高床の下の空間確保により、Type1と比較すると、より多様な生活行為に利用している。また、高床を支える柱を木角材からコンクリート製の柱と礎石に置き換えた場合もある。(建築面積、約20~50㎡)

【Type3】(3軒) Type2の高床の下の空間の柱間に壁を構築した住居形態である。壁で囲われた高床の下の空間はプライバシー性が高まり、住戸内の私的空間の増大に寄与している。(建築面積、約30~50㎡)

4-4. 炉の位置に見る違い

離れの有無と炉の位置によって、3つのタイプに分類した。(表4-4)。

【TypeⅠ】(6軒) 炉が住居に隣接した屋外もしくは高床下の地面にある、もっとも簡易な炉の形状のもの。炉はラテライト等の石材で作られ、料理時には鍋やフライパンを使用する。

【TypeⅡ】(15軒) 炉が家屋内の高床の上に設置されている形状のもの。炉は木枠に灰を溜めて作る。そして、床にそのまま置かず、机状になるよう、足をつけて設置する。家屋の中に炉を設けた場合は、炉空間が他の床面より約20cmほど低く、また床板間の隙間が居住空間よりも広い。炉空間には煙を排出する開口部が開けられている。この形状のものは後から増築したケースが多い。

【TypeⅢ】(4軒) 住居に隣接して離れが設置され、そこに炉を設けた形状。離れ空間内の炉は地面にある場合と、床上にある場合の両方がある。こうした離れは食事及び談笑団欒のための空間としても機能している。さらに、売店機能が付加した場合もある。

表4-2. 調査対象者の家屋状況と利用井戸

被験者番号	家屋番号	建物の用途(形態、所有、その他)	礎石材	柱材(1階)	柱材(2階)	壁材(1階)	壁材(2階)	屋根材	高床の高さ	炉の位置	利用井戸	Type
No.01	S05	住居(高床)	コンクリートラテライト	木角材	木角材	一部木材	木材	瓦葺き	1.9m	家屋内	④	2-ロ
No.02	N04 N03 N05	住居(1階部分に壁を構築) 店舗 兼 炉(N04の所有) 倉庫(N04の所有)	コンクリート 無し	コンクリート 丸太材	木角材 —	煉瓦、モルタル —	木材 —	瓦葺き 草葺き	2.4m — —m	離れ 地面	② —	3-ハ
No.03	N11	住居(高床)	コンクリート=無し	コンクリート	木角材	—	木材	瓦葺き	2.0m	家屋内	⑥	2-ロ
No.04	S08	住居(高床)	コンクリートラテライト	木角材	木角材	—	草=木材	トタン葺き	1.3m	家屋内	—	1-ロ
No.05	N16 N15	住居(高床) 店舗:甘味処(N16所有)	コンクリート 無し	木角材 丸太材	木角材 —	— —	木材 パネル	トタン葺き 草葺き	2.0m —	家屋内	⑩ ②	2-ロ —
No.06	S03	住居(高床)	コンクリート	木角材	木角材	—	木材	瓦=草葺き	1.9m	家屋内	④	2-ロ
No.07	N14	住居(高床)	コンクリート	木角材	木角材	—	木材	トタン葺き	1.7m	家屋内	⑥	2-ロ
No.08	S15 S14	住居(高床) 炉 兼 休憩所	ラテライト 無し	丸太材 丸太材	木角材 —	— —	木材 —	草葺き 草葺き	1.3m —	離れ 地面	⑧ ⑤	1-ハ
No.09	S11	住居(平屋)	無し	丸太=木角材	—	木材	—	草葺き	0.2m	地面	⑤	1-イ
No.10	N13	住居(高床)	コンクリート	木角材	木角材	—	木材=草	トタン葺き	1.5m	家屋内	⑥	1-ロ
No.11	N01	住居 兼 店舗(平屋)	無し	木角材	—	草葺き	—	草葺き	—	地面	⑧	—
No.12	S09	住居(高床)	コンクリート	木角材	木角材	—	木材	瓦葺き	2.0m	家屋内	⑤	2-ロ
No.13	S01 S02	住居(高床) 住居(平屋、建設途中)	ラテライト 無し	木角材 丸太材	木角材 —	— 草葺き	木材 —	トタン葺き 草葺き	1.2m —	地面	⑧ ⑧	1-イ —
No.14	S07	住居(高床)	コンクリート	木角材	木角材	—	木材	瓦葺き	2.1m	家屋内	⑨	2-ロ
No.15	S16	住居(高床)	コンクリート	木角材	木角材	—	木材=パネル	トタン葺き	2.0m	家屋内	⑨	2-ロ
No.16	N02	住居(高床)	コンクリート	コンクリート	木角材	—	木材	トタン葺き	2.0m	地面	⑦	2-イ
No.17	N10	住居(高床)	無し	コンクリート	—	—	木材	トタン葺き	2.1m	地面	⑥	2-イ
No.18	S12	住居(高床)	コンクリート	木角材	木角材	—	木材	—	2.1m	家屋内	⑧	2-ロ
No.19	N12	住居(高床)	コンクリート	木角材	木角材	—	木材	トタン葺き	1.9m	家屋内	⑥	2-ロ
No.20	N07 N06	住居(高床) 住居 兼 炉(高床、N07の所有)	コンクリート コンクリート	コンクリート 木角材	木角材 —	— 草	木材 —	瓦葺き トタン葺き	2.5m 2.5m	離れ 家屋内	⑥ —	2-ハ 2-ロ
No.21	N08	住居(1階部分に壁を構築)	コンクリート	コンクリート	木角材	煉瓦、モルタル	木材	瓦葺き	2.0m	地面	⑥	3-イ
No.22	S06 S04	住居(高床) 炉 兼 商店	コンクリート 無し	木角材 丸太材	木角材 —	— 草葺き	木材 —	瓦葺き 草葺き	2.1m —	離れ 地面	⑤	2-ハ
—	N09	住居(高床)	コンクリート	丸太材	木角材	—	パネル	トタン葺き	1.3m	家屋内	⑥	1-ロ
—	N17	住居(高床)	コンクリート基礎	コンクリート	—	—	木材	瓦葺き	—	家屋内	⑥	3-イ
—	S10	住居(高床)	ラテライト	木角材	木角材	—	木材	草葺き	1.3m	家屋内	⑨	1-ロ
—	S13	住居(高床)	ラテライト	木角材	木角材	—	木材	—	1.7m	S14	⑨	—

表 4-3. 高床に見る住戸の分類

タイプ分けの流れ	軒下の高さが1.5m以上である			家畜：主に牛を対象としている。鶏などは含まない。高床の床下で飼育出来るかを検討。	隣人：その住居に住んでいない集落の人々。高床の下で集まって話や休憩が出来るかを検討。	住人：その住居に住んでいる家族。高床の下で作業やその他生活が出来るかを検討。	家財道具：木材や自転車など、生活の中で用いている道具を指す。		
	NO	YES	YES						
	Type1	Type3	Type2						
典型的な模式図	■主な仕様 屋根：草葺き 壁：木材 柱：木材 礎石：ラテライト			■主な仕様 屋根：瓦、木材 壁：木材 柱：コンクリート、木材 礎石：コンクリート、ラテライト			■主な仕様 屋根：瓦、木材 壁：木材、煉瓦 柱：コンクリート、木材 礎石：コンクリート
	<p>建築面積 20~30㎡ 高床の高さ 0.2~1.5m</p>			<p>建築面積 20~50㎡ 高床の高さ 1.5~2.5m</p>			<p>建築面積 30~50㎡ 高床の高さ 1.8~2.5m</p>		
住戸の特徴	従来から作られていると思われる住戸の形であり、もっとも初期的なバナキュラー住宅。建設は住人やその家族兄弟で作ることができる。			高床が高く、1階部分を利用可能にしている。また、1階部分をコンクリート製の柱や礎石にし、コンクリートの壁を造っている住戸もある。建設は柱屋根の部分は集落の人々に手伝ってもらい残りは住人が作る。			Type2の1階部分にコンクリート製の壁を増設している住戸であり、1階部分をプライベート空間として利用できる住戸。建設は町の業者にたのんでコンクリートを用いて作る。		
屋根の形状	切妻が多い、一部片流れも見られる。片流れであっても角度が変化しているものも見られる。			切妻、寄棟、大小の切妻が2つ連なっているM形が見られる。増設部分と見られるところは複雑になっている。			切妻、寄棟、大小の切妻が2つ連なっているM形が見られる。増設部分と見られるところは複雑になっている。		
高床の高さについて	家畜の牛が入ることができる高さを持つ(1.3~1.6m)。人は少ししかまないと入ることができない。人間の生活空間のためではなく、家畜の飼育空間であったり、木材などの物を置くための空間として利用されている。			人が1階部分で活動できる程の高さを持つ(1.8~2.0m)。腰かけやベッドを置いており、日常の生活空間として、また仕事のための空間として利用されている。			人が1階部分で活動できる程の高さを持つ(1.8~2.0m)。日常の生活空間として、また夜間にバイクなどを閉まっておくための空間として利用されている。		
住戸を作る素材	バナナの葉などの植物を乾かしたものや木材で住戸の屋根や壁を作っている。礎石はラテライトやコンクリートを用いている。			主に木材で作っている。1階部分の柱はコンクリート製の住戸もある。屋根は瓦などを用いている住戸もある。礎石はコンクリートを用いている。			1階部分はコンクリートで柱や壁を作っている。2階部分は主に木材で作っている。屋根は瓦などを用いている住戸もある。		
一階部分と屋外空間の関連性 (事例写真)	<div>家畜の出入りと飼育：○</div> <div>住人の出入り：△</div> <div>家財道具の保管：○</div> <div>日常の仕事：△</div> <div>近隣の人の出入り：×</div>			<div>家畜の出入りと飼育：○</div> <div>住人の出入り：○</div> <div>家財道具の保管：○</div> <div>日常の仕事：○</div> <div>近隣の人の出入り：○</div>			<div>家畜の出入りと飼育：×</div> <div>住人の出入り：○</div> <div>家財道具の保管：○</div> <div>日常の仕事：△</div> <div>近隣の人の出入り：×</div>
凡例				○：出来る △：まあ出来る ×：出来ない					
住宅の改良希望									
住宅に対する住人の意見	・ お金がないので考えていない。 ・ 大きい家、新しい家はうらやましい。 ・ 子供も多いので余裕があれば拡大したい。 ・ 金銭的余裕があれば、コンクリートの柱と壁を付けたい。			・ モルタルの家はうらやましいがこの家でもまあ満足。 ・ 家を大きくしてからは精神的に安心する。 ・ 木が足りなくて家の壁があいている。 ・ 子供も多いので余裕があれば拡大したい。 ・ 金銭的余裕があれば、柱をもっと高くしたい。 ・ 高床下も居住空間にしたい。			・ 十分満足している。 ・ 家財道具(バイク)を盗難から防ぐことができている。		

表 4-4. 炉の位置による分類

タイプ分けの流れ	離れがある。			炉：主に火を使う家事の場所を指す。地面に設置するものと木枠に灰をためたものがある。	離れ：その住居の隣に食事や休憩をするために新たに1棟または1屋根を設けた場所を指す。
	NO	YES	YES		
	Typeイ	Typeロ	Typeハ		
タイプの模式図(断面図)	<p>←母屋</p> <p>食事や団楽は二階で行う</p>	<p>←母屋</p> <p>炉は高床の下だけでなく、外に設置する場合もある。外の場合は大きな鍋を用いる時に利用することが多い。</p>	<p>←母屋</p> <p>食事や団楽は二階で行う</p> <p>ほとんどの家庭がこのタイプに属する。Typeハに属する場合も家屋内に炉を設置しているケースもある。</p>	<p>←母屋</p> <p>炉の設置場所は様々である。地面に置くケースや、床に設置するケースの両方がある。</p> <p>↓食事や団楽は離れで行う</p> <p>離れ→</p>	
炉の特徴	もっとも簡単な炉の作り方で、地面に直接ラテライト等の石材を置き、鍋等を火にかける形態をとっている。	家屋内に木枠に灰を溜めた物を炉として用いている。木枠を直に床に置いた形態と木枠に足を付けて用いる形態がある。	炉のある空間は居住空間よりも約20cmほど低くなっており、床面に隙間が空いている。また、煙を逃がすための開口部を設けている事が多い。	炉はTypeイとTypeロ同様に、地面に直接置く場合と灰を溜めた木枠で作成し、床下に置いた場合の両方がある。	
場所の特徴	高床の床下部分や、家屋空間の外又は軒下に炉を作っている。			離れにすることで、家事炊事や日常の談笑団楽空間としても機能している。さらに売店にしている場合もある。	
事例写真					
住民の希望と移行過程	<p>増築することで、炉の場所の確保をする。</p> <p>新たに離れを新築する。炉と休憩場所を設置されている。</p>			この改良はまれである。	

4-5. 住居形態改良の意向

【住居形態について】 高床 Type1 の住人は高床 Type2 に、高床 Type2 の住人は高床 Type3 に改築したいと希望している。その理由としては、家族の人数増加に伴い、私空間拡大やバイク等家財道具の保管・盗難防止のため等が挙げられた。建設コストは Type1 → Type2 → Type3 の順に高くなる。また、Type1、Type2 は住民または周辺住民で建てることができるが、Type3 は住民だけでは建てることは出来ず、専門業者に依頼する必要がある。

【炉の位置と形状について】 炉の改良や離れの設置は主に金銭的条件によって実現が左右される。金銭に余裕が出来たときには、Type イから Type ロに炉空間を増築するか、土地と金銭に余裕がある場合は離れを新築し Type ハを選択することが多い。Type ロから Type ハという移行は調査対象中 1 件例があったのみでほとんど行われていない。

5 章. 住居態と空間利用

ここでは住居形態毎の生活空間の利用実態とそれらの差異を比較した上で、アンコール地域における住居形態について展望する。

5-1. 生活空間の利用実態

高床 Type2 かつ炉 Type ロが集落内に最も多く存在するので、【高床生活タイプ】として利用実態の詳細を調査する。また、4 章で把握した、高床と炉の改築希望を参考にし、離れを持つ【離れ生活タイプ】（高床 Type1 もしくは Type2 かつ炉 Type ハ）、高床下空間に壁を構築している【閉鎖生活タイプ】（高床 Type3 かつ炉 Type イもしくは Type ハ）も比較として取り上げる。

【高床生活タイプ（図 5-1）】 この住居では高床下の私的空間に住人及び近隣の人々が談笑団楽が可能な公共的性格を生みだすことを可能としている。このような半公共的空間では、ミシン等の家事道具の設置、内職、など日中間の大半の活動も行われ、一部は生活用水や資材等の保管にも利用されている。図 5-1 の事例住居は家畜を飼育していないが、同タイプのもので高床の下で飼育している場合が多い。就寝等を含む夜間の生活行為は母屋の高床の上で営まれる。調査対象世帯中、合計 11 件^{註 11)} があてはまる。

【離れ生活タイプ（図 5-2）】 この住居では離れを設置し、そこに炉を設け、家事炊事、住人及び近隣の人々同士の談笑団楽、休息等、日中の行動のほとんどが離れで営まれている。生活用水や簡単な家財道具も保管されている。就寝等を含む夜間の生活行為は母屋の高床の上で営まれる。調査対象世帯中、合計 3 件^{註 12)} があてはまる。

【閉鎖生活タイプ（図 5-3）】 この住居では高床の下に壁を構築し、それまで母屋の高床の上のみにあった私的空間を 1 階の高床の下にも増大させている。日中の談笑団楽、家事や内職等は大きく開放された 1 階の出入り口で行われている。1 階の壁は煉瓦積みモルタル仕上げ、床はタイルを貼っている。炊事場は家屋の裏手にあり、食事は 1 階の室内で行っている。しかし、1 階は採光が悪く、出入り口付近の空間以外は主

図 5-1. 高床生活タイプの事例

図 5-2. 離れ生活タイプの事例

図 5-3. 閉鎖生活タイプの事例

表 5-4. 高床下空間への壁の構築と離れを設置した場合の利点欠点

高床下空間へ壁を構築した場合	
利点	●人数増加に伴う部屋数の確保がしやすい ●高床の下に私的空間が確保可能 ●バイク等の家財道具の保管ができる
欠点	●内部が薄暗い ●家畜を床下に飼うことが出来ず、別途小屋を必要とする ●風通しが悪く、過ごしにくい ●設置コストが高い、専門家が必要である ●建て替えが出来ない
住居に隣接して離れを設置した場合	
利点	●離れの利用方法が多様である ●隣人がアクセスしやすい ●炊事家事仕事談笑団楽が同一の場所で行うことができる ●風通しがよく、過ごしやすい ●建設コストが安い ●住人もしくは集落内の人で簡単に建設出来る
欠点	●人数の増加に対応するものではない ●新たな私的空間の確保にはならない ●離れの建設のために、土地に余裕があることが必要

に電化製品やバイク等の家財の保管に利用されている。就寝等を含む夜間の生活行為は1階と2階の両方の空間が利用されている。調査対象世帯中、合計2件^{注13)}があてはまる。

5-2. 高床の下への壁の構築と離れを設置した場合の差異の考察

住民の住居に対する改良願望の強いものに、高床の下への壁の構築と住居に隣接して離れを設置する方法があげられる。両者の利点欠点を整理する(表5-4)。高床の下への壁の構築は部屋数の増加や防犯性の高い住宅への憧れからくる。離れの設置は、元来の高床の下空間利用方法とその機能が持つ半公共的性格が敷地内に分散し、拡大された効果が観察できる。高床の下に壁を構築した住居でも1階の開口部に日中の生活行為が集中する傾向があるが、これは伝統的な生活スタイルの名残として注目される。

また、住民は高床をより高く、建築面積もより大きくすること、そして高床の下への壁の構築を望んでいるにも関わらず、必ずしも各世帯の収入や同居人数の変化に比例して実際の改築が行われているわけではないことが分かった。これはお金を使用する優先順位が住宅だけではないからと考えられる。

5-3. アンコール地域の農村における住居形態の変化とコミュニティの展望

アンコールクラウ村では住居の高床の下に壁を構築した改築やそうした改築願望により、農村特有の伝統的な居住様式が解体しつつある。このため、元来の伝統的な住居形態がもたらすコミュニティ基盤への効果を明らかにし、その意義について住民らが自覚する必要がある。アンコール遺跡とアンコールクラウ村の関係は遺跡への就業等による新しい生活スタイルの傾向と寺院への参詣等による伝統的性格の継承の両面性が見られる。具体的には、離れの設置は新しい生活スタイルからの欲求により、生み出されるものであるが、同時に住民とコミュニティの伝統的な関係を維持したものともなっている。このようにアンコール地域特有の性格を活かして、村の将来像を検討していくことが、アンコール地域における農村の持続的発展だけでなく、地元住民にも支えられた、「生きた遺跡」としてのアンコール遺跡の保全にも寄与することになると考えられる。

6章. 結論

以上のことから、本研究では次のことが明らかになった。

1. アンコール遺跡と隣接していることで、アンコールクラウ村住民にとっては娯楽や信仰だけでなく、新たな雇用の機会と現金収入をもたらし、本来の農業中心の生活が変化している。しかし、遺跡に関連した就業者が家庭にいないか否か、また就業先の団体の違いにより、世帯毎の収入格差は大きい。
2. 今後現金収入が増大していけば、電化製品、バイク等の私的資産の購入、住居の改築等、多様な使途が考えられる。住居については改良願望に従って、生活空間の増大のためには高床の十分な床高の確保や離れの設置、私的空間空間の増大のためには高床の下に壁を構築していく住居形態が増えていくことが予想される。
3. 住居に隣接した離れ空間に炉を設置した場合、そこに発生する日常生活行為によって、空間の多目的利用と近隣住民のコミュニケーション形成に効果が認められる。
4. 高床の下に壁を構築した住居形態には元来の高床住居が高床の下に保持する、公私が曖昧な独特の空間が縮小する様子が見受けられた。具体的には、高床下空間での家畜の共有化、近隣同士で活動の様子を目視できる家事・家内労働、近隣住民の自由な通り抜けや談笑団欒などの利用が衰退する傾向にある。

注

- 注1) 1992年に人類普遍の価値をもつ遺跡としてユネスコの世界遺産リストに登録されたアンコール遺跡は、危機にさらされている遺跡としても同時に登録されており、保存修復が緊急の課題となっている。
- 注2) 最貧国の一つであるカンボジア(国連文書A/47/278E/1992/77)では、各国の様々な政府機関やNGOによって井戸供給、学校建設をはじめとした様々な援助や活動がなされている。援助によって近代化・観光化した地域は数多くあり、その発展と同時に大企業の地域進出も起こった。しかし、その恩恵と引き換えに、環境の悪化や貧富の差の発生・拡大等、発展による多方面への弊害も問題視されている。
- 注3) 岩崎ら(文献1)は、『伝統的な生活様式と地域組織が崩れて、市場経済の浸透、換金作物の栽培の拡大、消費の増大がみられる。一方、主として先進国の消費のために森林が伐採され、換金作物が契機となって土地の塩化・流出が生じ、砂漠化が進む。また、伐採が頻発する。その結果、都市への人口流出や国際的な労働力移動が加速されて、最終的に自給経済の崩壊と地域環境の崩壊が進行する。』と指摘する。
- 注4) カンボジアの悲劇を忘れないために、世界中の関心が高い、危機に瀕したアンコール遺跡の救済への参加を呼びかけ、カンボジアの復興のために国際社会が協力する、という日本が先導的な役割を担って1993年東京で始まったアンコール遺跡救済国際調整会議(ICC)は10年で大きな成果を納めたと2003年パリ会議において評価された。このようなアンコールICC方式をアフガニスタンやイラク、そしてアフリカの紛争国へ広げよう、という試みも始まっている。
- 注5) 1994年に日本政府は「日本政府アンコール遺跡救済チーム(以下JSA)」(团长: 中川武、早稲田大学教授)を結成し、アンコール遺跡内で保存修復活動を行っている。日本政府アンコール遺跡救済チームHP: <http://www.angkorjsa.org/> 文献2)参照)
- 注6) プノン・クレアン 388m、プノン・ボック 212m 等
- 注7) カンボジアでは系統的な国勢調査等は行われていない。各農村の人口は村長が選挙登録を参考に把握していると思われる。
- 注8) 調査通訳にはJSA団員である、Chea Sopanha氏、Eang Chamroeun氏、Chroek Savy氏、及びAPSARAの協力を得て進めた。
- 注9) APSARA: Authority for Protection and Management of Angkor and the Region of Siem Reap、アンコール遺跡の保存とアンコール地域での開発行為の管理を行う公社。<http://www.autoriteapsara.org/>
- 注10) EFEO: École Française d'Extrême-Orient、フランス極東学院、フランスの国立研究機関、2005年現在アンコール・トム内のバポーン遺跡の修復を行う。
- 注11) 本稿、表3-2及び表4-2内の被験者番号No.01,03,05,06,07,12,14,15,18,19,20
- 注12) 本稿、表3-2及び表4-2内の被験者番号No.08,20,22
- 注13) 本稿、表3-2及び表4-2内の被験者番号No.02,21

参考文献

- 1) 日本国際ボランティアセンター(JVC) 岩崎駿介他、『人間居住キーワード事典 都市・農村・地球』、中央法規、1995年5月
- 2) 中川武監修、『アンコール遺跡調査報告書』(各年次1995-2004年)、日本政府アンコール遺跡救済チーム
- 3) 吉阪隆正他、『住まいの原型Ⅱ』、鹿島出版会、1997年5月
- 4) 石毛直道他、『住居空間の人類学』、鹿島出版会、1971年3月
- 5) 原広司、『集落の教え100』、彰国社、1998年3月
- 6) 今和次郎、『考現学入門』、ちくま文庫、1987年1月
- 7) 吉阪隆正他、『韓国集落調査研究報告書』、早稲田大学韓国集落調査隊、1976年3月
- 8) 井上真・宮内泰介(編)、『コモンズの社会学』、新曜社、2001年3月
- 9) 井上真、『コモンズの思想を求めて』、岩波書店、2004年1月
- 10) 河本順子他、『ラオス中部における農山村住宅の形態変遷』、日本建築学会計画系論文集、第577号89-96、2004年3月
- 11) 鄭王文静他、『台湾蘭嶼島ヤミ族住居の近代化における住居空間の変容について - 視界の定量化による集落空間の評価手法の研究(その2) -』、日本建築学会計画系論文集、第578号、p.17-24、2004年4月
- 12) 尹俊到他、『ベトナムの居住地と韓国の集合住宅団地における子どもの外部空間行為の比較研究「資源」概念の提案と行為-資源関係の考察』、日本建築学会計画系論文集、第576号p.59-66、2004年2月
- 13) バタナ ボンティップ他、『ヴィエンチャン特別市における集合住宅の現状と住まい方』日本建築学会計画系論文集、第585号p.1-8、2004年11月
- 14) 高村雅彦他、『チャオプラヤー川流域の都市と住宅 - タイ・水辺都市のフィールド調査1998-2003-』、法政大学大学院エコ地域デザイン研究所・歴史プロジェクトアジアまち居住研究会、2005年3月
- 15) 高村雅彦他、『パリ 王都の空間構造と楽園の形成過程 - クルンクのフィールド調査1999-2002-』、法政大学大学院エコ地域デザイン研究所・歴史プロジェクトアジアまち居住研究会、2005年3月
- 16) 布野修司編著、『近代世界システムと植民都市』、京都大学学術出版会、2005年2月
- 17) 中村茂樹他、『アジアの水辺空間』、鹿島出版会、1999年11月

(2005年5月9日原稿受理、2005年12月15日採用決定)